

令和3年10月5日(火)

ワークショップについて

社会教育委員 木村いほ子

- 1 日 時 令和3年9月28日(火) 14:00~16:45
- 2 会 場 黒崎市民会館1階 ホール
- 3 参加者属性 グループ3(参加者4名)
公民館運営審議会委員1/図書館協議会委員1/ユースアドバイザー1/社会福祉協議会職員1

4 意見交換を行った活動事例

【事例研究発表】

- 1 音声訳ひばり会 南社教福祉授業への協力と次世代育成
- 2 みらいず Works 高校生の学びを豊かにする仕組みづくり

【2つの事例をもとにグループワーク】

○全員で自己紹介の後、事例研究発表の感想などを出し合う。

(主な感想) 次世代育成するには、まず現世代育成が大事と思った/地域でも納涼会など、横のつながりを創る機会があったがコロナの影響でなくなった/あえて場を作らないと交流がうまれないのか/福祉教育を推進するには先生の理解と協力が必要など。

○付箋メモから意見交換をする。

(困っていること) 学校の先生との協力方法/オンライン化の学び、出会いが増える一方、生身の交流が減っている。見えるもの(数字やデータ)に重きがおかれている。

(取り入れてみたいこと)「ボランティア情報」などを漠然と呼んでいた。身近な事として読みたいと思った/音声訳を体験したいと思った/小学生と高校生と一緒に学び合う機会は少ないのですばらしいと思った/次世代育成は現世代育成の結果なので、まず現世代育成をしてはどうか?

(こうしてみてもどうか) 音声訳は良い試みなので、各区で増やした方が良い/大人と学生が直接関わり、相手の反応がわかるようなプログラムにすること/高3生は受験のみになりがちのところ、事例2は良かったと思う/学校教育と社会教育が連携しているのは素晴らしい/事例2 アイディア出し(先輩)で終わらず実施している(後輩)のが素晴らしい

○自分たちでやってみてみたい次世代育成につながる事業案を考える。

(思いっくまま、否定せずアイディア出しをする。)

- ・キーパーソンに「わかる人」「知っている人」を置く。例) 楽器に触れる
- ・年齢差をいかして実施する 例) 高校生が小学生にクラフト指導など
- ・視点を変えて物事を見る 例) ドローンを飛ばす: 地理や環境、歴史、農業を学ぶことにつなげる。
- ・世代間交流も兼ねる 例) 梅干しづくり: 伝承と次世代育成につなげる、など。

5 社会教育委員として、ワークショップを運営して感じたこと

(良かった点)

- ・参加者の属性が多様で、それぞれの立場から意見交換ができた。
- ・会場も広く、開放的な感じがあり、かつ自由にレイアウトできた。
- ・隣のグループの声が聞こえてこないで、自分のグループに集中できた。
- ・グループワークの時間は、ちょうど良かった。

(改善点)

- ・書きにくかったので、ホワイトボードの模造紙を張り替えればよかった。
(向き) タテ⇒ヨコにする。⇒事前に確認作業をすればよかった。

(感じたこと)

- ・参加者からも「良かった」という感想を聞いている。リアル参加の良さを体験する機会となった。参加者も今までの活動や日常を振り返り、意見を述べられていたのが素晴らしいと感じた。

6 次世代育成につなげるための課題

- ①「次世代育成」という言葉がわかるようでわかりにくい。大切な事だけど伝えにくい。
- ②各所属の活動内容と「次世代育成」をどうつなげるか。

7 課題の解決策、ヒント

- ①キャッチコピーを考えてはどうか？

育成する側と育成される側の両者がわかる、「なるほど」という表現を探してみたい。

- ②今回のように、他団体との交流、意見交換の場を重ねていく。活動内容と「次世代育成」がどうつながっていくのか「問い」をたて深めていく。

以上